

## 3 歳児のボールあそび

日下陸矢（おおぞら保育園・おおぞら夜間保育園）

### 1. ボール実践を始めたきっかけ

きりん組（3歳児クラス）男児11名女児9名を担任2名で保育している。3歳児の担任は二度目になる。前回の3歳児は円ドッジなどに取り組んだが、ボールを上手く扱えない子が多く、みんながボールあそびを楽しむまで至らなかった。当時の自分はボールあそびといえばルールのあるあそびという固定概念しかなかった。しかし、同志会に入り学ぶ中で、それだけではなく、色々なあそびを通して、楽しみながら身体や道具の使い方を知っていく過程の大切さを知った。そこで、今回はそういった気づきや学びをもとに継続的にボールあそびに取り組み、3歳児にとって楽しいボールあそびを考え、みんながボールあそびを楽しめるクラスにしていきたいと思った。

### 2. ボールとたくさん関われるように

初めに、園庭での自由あそびでボールを出してあそんでみた。上に投げて、キャッチ、壁にあてる、担任が足を開いてトンネルを作りそこに入れるなど色々なあそびを楽しんでいた。特にトンネルにボールを入れるあそびを楽しむ姿があったので、2種類のゴールを作りあそんでみることにした。

1つは、フラフープにすずらんテープをつけて天井から吊り下げる形。もう一つはベンチを使い、下をくぐらせる形のものだ。そうして、投げる位置をテープで印をつけ、2つのゴールにボールを入れるあそびをした。しかし、ボールをあそびを始めたばかりの子どもたちにとって、小さな枠に向かってボールをコントロールすることは難しかった。枠の中に入っても、大きく喜ぶ姿はあまりなく、達成感が感じにくいようだった。ゴールの数も限られているので、待ち時間も長くなり、一人ひとりがボールに触れる時間も短くなってしまった。

そういった姿から、まずは、3歳児らしく思い切り身体を使い、たくさんボールと関われるあそびを大切にしていきたいと思った。

そこで、今度は近隣の公園へボールを持ち込みあそぶことにした。公園には長く緩やかな坂や、急な坂が多くあり、そんな環境も使いながらあそべると思ったからだ。予想は的中し、坂の上からボールを転がして追いかけたり、逆に下からボールを投げ、転がり返ってくるボールを捕ることを楽しむ子もいた。自分の後ろにボールを置き、ボールに当たらないように、坂を下るあそびをする子もいた。坂から転がるボールの捕り方も手だけでなく足で止めたり、お腹やお尻で止めたりする姿もあった。子どもたちの姿を周りへ広げることで友だちと、同じようにあそびを楽しんだり、新しいあそび方を考えようとする姿

があり、とても面白かった。子どもたちはボールの予測できない動きが面白く、あそびながらボールがどう反応するか試しているようにも見えた。

### 3. オニのごっこあそびとボールあそび

2月に園の行事で節分があり、その経験から「おにはそと一」と自由あそびでオニのごっこあそびを楽しむ姿があった。ごっこが大好きなクラスということもあったので、オニのごっことボールあそびを結びつけてあそんでいくことにした。

始まりは、ボールあそびをしている時に担任がオニになって登場するところからした。オニになって出ていくと「おにはそと一」と投げる子どもたち。ボールが当たる度に「いたい」「やめろ」とオニが反応することが面白くて、何度も投げつけていた。「やられた」と言いオニが逃げていくと「やった」と大喜びの子どもたちだった。その日から、「またオニくるかな」と期待を膨らませる姿も出てきて、このあそびを導入に、オニのごっこあそびを始めていった。

オニとやりとりをした翌日、またオニが来たときに負けないように強い豆を投げる練習をするという話から、段ボールにオニの絵を張り付けて的当てあそびをした。

すると、前回のゴールであそんだ時とは、大きく違って意欲的に何度も取り組む姿があった。ごっこが入ることでオニを倒すという目的が入ったことや、的に当てると「バコッ」と音が鳴ったり、的に倒れて落ちたりするなど視覚的にもわかりやすく子どもたちも達成感を得られやすいのだと思った。

投げ方は初めは、下投げで投げる子が多かった。でも、それだと山なりにボールがとんだ的を通り越したり、あたっても倒れにくかったりした。上投げで、振りかぶって投げている子は、的に向かってボールが飛んでいきやすく、力も入るので、よく倒すことができていた。そんな友だちの姿を周りにも広げていくことで投げ方も変わっていった。回を重ねるごとに、上手く倒せるようになってきたので距離を遠くしてみたが「遠い」「面白くない」と言って嫌がった。今はまだ遠くから当てたいという思いではなく、近くからでもたくさん倒したいという思いが強いことがわかった。的を作ったのあそびをしてから「おとうさんオニも作りたい」「青オニも作る」と色々なオニの的を作りたいという声が出てきたので、子どもたちと様々な的を作っていくことにした。遊ぶときは投げる場所、的の場所などにも変化をつけていくことにした。

### 3. 色々な的作り

そうして3種類の的が出来上がった。1つは、風船オニだ。風船にオニの絵を書いたもので、床、ベンチ、天井、壁と色々な場所に貼れるし、量もたくさん保障できた。天井は下投げ、ベンチの下には転がす、壁は上投げなど場所によって投げ方を変えたりする姿もあった。

2つ目は、大きな段ボールに砂などの重りをつけた、デカオニだ。台の上に乗せて何度も当てて押し込んでいけば、倒れるようにした。初めは途中で諦める子もいたが、一度台から落ちるのを見てから、倒すことに見通しが持てるようになり、最後まで投げきれなくなった。

3つ目は、牛乳パックで作った、チビオニだ。担任がチビオニの親になり、守る。子どもたちがそれを避けてチビオニを倒すというあそびをした。何度かあそぶうちに、子どもたちがオニをしたいという声も出てきたので、入れ替わって、あそぶこともした。そんな風に多様な的を作ったあそんでいくことで、日々変化があり、子どもたちの気持ちも持続していったように感じる。

#### 4. 実践を終えて

今回、3歳児クラスでボールあそびに取り組んで、色々なあそびを通して、たくさんボールに触れる経験を保障していくことの大切さを知った。

その中で、投げる、蹴る、転がす、捕るなどやり方によって色々な動きや反応が起きたり、予測できないことに面白さを感じているようだった。それは、あそびの中でも的によって投げ方を変えたり、身体のあちこちを使ってボールを捕ってみたり、うんていの穴にボールを通そうとしたり、子どもたちなりに考えて、あそびを生み出したり、試そうとする姿が多く見られたからだ。その積み重ねが、子どもたちのボールという教材への興味、関心に繋がっていったように思う。

的のあそびで言えば、音や目で見てわかる、倒す、当てる目的をわかりやすくするなど、達成感を感じやすいあそびが必要だと思った。

反省点では、ボールの素材や大きさの追求や、投げ方の指導などどんな風にしていくのかなどはきちんと分析したり、考えることができていなかった。4歳児以降では、そうい

った経験、力を土台に、今度はボールをコントロールしたり、動きを予測したりする面白さ、友だちとの繋がり、ルールあそびの楽しさを知っていくように思う。

ボールの種類によってもあそび方、投げ方も変わるし、どんな風に身体を意識すれば、コントロールできるようになっていくのかなど、次に実践をする時にはそういったところも考え取り組んでいきたいと思う。